

# 小学校社会科の授業のユニバーサルデザイン

## 第5回 「社会科授業の焦点化」

### ◆陥りがちな2つのスタイル

社会科が苦手だという教師は多い。「何をどこまで教えたらいいいのかがわかりにくい」という困り感を多くの教師から聞く。

「社会科は学習内容が曖昧で授業づくりが難しい」という教師の意識は、大きく2つの授業スタイルを生み出すことになる。1つは、「教師主導の講義型暗記重視授業」、もう1つは、「子ども任せの活動のみの授業」だ。

何をどこまで教えたらいかが分からない状況で、「真面目な」教師は、せめてテストで出題される内容や用語はしっかり押さえなければと考える。やむを得ず一方的な説明を始める。子どもも応える。暗記できたかできないかが問われる。受動的な授業の中で子どもの表情が沈んでいくのに、さほど時間はかからない。

何をどこまで教えたらいかが分からない状況で、「良心的な」教師は、せめて子どもが楽しく活動できるようにしようとする。自由に図書室で調べたり自由に新聞を作らせたりにする。自由なので子どもは楽しい。しかし、学習内容の定着は怪しい。

「教師主導の講義型暗記重視授業」「子ども任せの活動のみの授業」、この2つの授業スタイルは両極に位置しているように見える。しかし、その原因は同じだ。教師が学習内容を十分に規定しきれていないことから生じている。

受動的な社会科授業、這いまわる社会科授業から抜け出す第一歩は、社会科で、単元で、授業で、子どもが何を獲得できればよいかを教師がしっかりとらえておくことだ。

### ◆「社会的見方・考え方」を焦点化する

社会科で子どもに獲得させたいことは何だろうか？ それは「社会的見方・考え方」である（本連載第2回「社会科授業のUDとは ～社会的見方・考え方～」参照）。

すべての子どもにとって楽しく手応えのある社会科授業をつくり出すためには、教師が「社会的見方・考え方」を事前にしっかり焦点化しておく必要がある。ここが曖昧だと、先ほど述べたように、授業は迷走する。

では、どのような手順で「社会的見方・考え方」を焦点化すればよいのだろうか。オーソドックスな方法は、学習指導要領解説を確認しながら授業でねらうべき「社会的見方・考え方」を導き出す方法である。学習指導要領解説の確認は不可欠だし、定期的に行わなければならない方法である。しかし、我々小学校教師は社会科だけを担当しているわけではない。多くの教師が国語も算数も体育も担当している。すべての教科で毎時間ごとに学習指導要領解説を手に取りページを開くことは実際の生活の中ではなかなか難しい。

そこで、ここではより簡単で効果的な方法を勧めたい。

複数の教科書を読み、その異同に注目するのだ。多くの教科書が1単位時間の授業を2ページで構成している。2～4社分の教科書を読んでも4～8ページ。さほど時間をかけないで共通点と相違点を確認できる。

5年生の「気候の特色と人々の暮らし」を例にとろう。同じ沖縄の農業に関する内容でも、教科書により、パイナップル、ゴーヤー、マンゴーといったように、扱っている社会的事象が異なることがある。しかし、「沖縄では台風が多い高温多湿の気候を克服したり、利用したりしながら農業を行っている」という点は、どの教科書にも共通しているはずだ。この共通点が、絶対にはずしてはならない、授業でねらうべき「社会的見方・考え方」である。

複数の教科書を確認し、授業でねらうべき「社会的見方・考え方」を明確にしたら、それを子どもの言葉に変換する。授業の節目で、子どもがどのような「まとめの文」を書けばよいかを具体的に考え、実際に子どもになったつもりで書いてみるのだ。

「まとめの文」は基本的には2文、必要に応じて3文で書く。1文目は獲得させたい「社会的見方・考え方」に直結する内容を端的に示した文。2文目は、1文目を具体的に説明した文だ。1文目はどの子どももほぼ同じ内容が記されていないが、2文目は具体例なので、子どもによって違うこともある。3文目は、1文目や2文目に書いた内容に対する自分の価値観。例えば、1文目は「沖縄で農業をしている人は暖かい気候を利用したり台風を克服したりして作物を作っている」。2文目は「例えば、ゴーヤーづくりでは〇〇な工夫をしている」。3文目は、「そのような農業をしている沖縄の人のことを私は〇〇と考える」となる。

このように、授業前に「社会的見方・考え方」をしっかり焦点化しておけば、授業がぶれない。

まとめる。

社会科授業を焦点化するとは、授業でねらう「社会的見方・考え方」を明確かつ具体的にすることである。

複数の教科書を活用しながら、焦点化を図ることで、暗記至上主義、極端な活動主義から抜け出し、子どもにとっても教師にとっても何を学んだのか、何を学ばせたいのかがはっきりとわかる。明示性の高い、手応えのある社会科授業が可能となる。

社会科授業の焦点化は、多くの教師が抱えている「社会科の学習内容は曖昧」という困り感と多くの子どもが抱えている「社会科はわからない、苦手」という困り感を克服する第一歩である。

**村田辰明（むらた・たつあき）**

関西学院初等部副校長。日本授業UD学会関西支部代表。すべての子どもが楽しく「わかる・できる」授業をめざし、社会科を中心に研究・実践を続けている。

(2016年9月執筆)